

日本脂質生化学研究会
(JCBL)

平成3年度会費払い込みのお願い

- 平成3年度会費 3,000 円を、3月末までにはさみ込みの振替用紙でお払い込みください。
- 振替用紙は1人1枚お使いください。不足の場合は郵便局の窓口へ備えつけの用紙をご利用ください。振替の送料は事務局負担ですので赤い振替用紙です。
会費送付先 振替番号 東京4-91400 日本脂質生化学研究会
- 本年度より入会希望の方は、事務局までハガキでご一報ください。そして、入会金 2,000円+平成3年度会費 3,000円=合計 5,000円を前記同様に郵便振替でお送りください。なお、振替用紙通信欄に新入会とお書きください。
- 本年より退会なさる方は、ハガキでご一報ください。
(事務整理の都合上、2年間滞納の場合は自動的に退会扱いといたします。)
- 本会報の受け取り人が、海外へ出られたり、或は他の場所へ転出された時は、お手数ですが返送または、転送をお願いします。
- 所属の変更、あるいは外国長期出張の際は必ずご連絡ください。

事務局 (〒173) 東京都板橋区加賀2-11-1 帝京大学医学部第一生化学教室内
日本脂質生化学研究会事務局 TEL (03) 3964-1211
(内線) 2225, 2226

会費締め

……………貴方の会費で運営されています

今日、お払い込みください……………

会の活動状況

4

高

しい

議

。

。

① 第32回日本脂質生化学研究会・研究集会の開催

第32回の研究集会は1990年7月6日(金)7日(土)の二日間、東京千代田区にある都市センターホールで開催された。

このホールは建築以来何年目になったのであろうか。各種の学会、研究会が開催されているので多くの諸兄はご存知の場所と思ったが、サーキュラー講演集に地図がなかったものでわかりにくいというご指摘もいただいた。

盛夏のことで外は酷暑であったが、会場は十分に冷房が効いて快適であった。

例年のことであるが、1年に1度この会で互に顔を合せる人も少なからずあり、発表会場にはいらずロビーでコーヒーを飲みながら、情報交換に余念のない人達も多勢見受けた。それもこの研究会の存在意義の一つであろう。

脂質領域も広範に拡大し、専門化が進み、異なる領域の研究発表が理解できなくなって来ているし、興味も持てなくなって来ていることは否定できない。会場が複数になったことは演題数の増加上やむを得ないとしても、自分の発表が終るとさっさと会場を出て、他の発表は聞かない人が増えて来ている。研究集会を、発表の実績稼ぎの場として利用しているだけの人も多くなっているようである。

様々な情報獲得手段が発達した現在、このように一堂に会した研究会、学会のあり方も、近々大きく変革されることがあるのではあるまいか。

今回の実行委員長の秦教授はずい分ご苦勞なされたことと思う。この研究集会が開催される直前に、慶応大学から杏林大学に移られ十分なスタッフが居られないままに、この研究集会を迎えられたようである。事務局も連絡をとったところ秦先生は慶応に居られない、どこへ行かれたか不明などと秦先生の所在を見失って慌てた時もあったくらいであった。

実行委員長とスタッフの方々に深謝する。

② 第32回日本脂質生化学研究会総会

平成2年6月7日(金)午後5時50分より、日本都市センターホール地下食堂に於いて開催された。

- 1) 会長挨拶 山川会長
- 2) 平成元年度事業報告、及び決算報告 植田庶務幹事
- 3) 会計監査報告 野島会計監査
拍手で承認
- 4) 平成2年度の事業計画、及び予算案の承認 植田庶務幹事
別紙参照
- 5) 役員の改選
平成2年12月31日で任期切れとなる会長、庶務幹事、会計監査の改選について、山川会長、植田庶務幹事、野島会計監査の再選案が総会に先立って開催された幹事会の決議事項として、植田庶務幹事より提案され、拍手でこれを承認した。
- 6) 幹事の改選
平成2年12月31日で任期の切れる幹事4名について再選が承認された。また、新任の幹事として、宇田 裕(新潟薬大)、島崎弘幸(帝京大)、鈴木康夫(静岡県立大)、宮沢陽夫(東北大)が選出された。任期は平成6年12月31日迄である。
- 7) 平成3年度の研究集会について 鬼頭幹事
次年度研究集会の実行委員長である鬼頭幹事より、準備状況について説明があった。7月15、16日に都ホテル(京都)で開催すること、また、祇園祭りと日程を合わせてあるので、昼は勉強、夜は教養に努めて欲しいとのことであった。
- 8) 平成4年度の研究集会について
実行委員長を山本 章幹事(国立循環器病センター)をお願いすることを決定した。
- 9) 本研究集会の実行委員長 桑 葭哉幹事より挨拶があった。

③ 平成2年度第1回幹事会

平成2年7月6日7日正午より、都市センターホール地下食堂で開催された。

出席者 41名(氏名略)

議事内容は、総会報告と同じ。

*事務局注 この研究集会時に開催される幹事会は、昼食を取りながら1時間程度であり実質的な審議ができないという意見が、何人かの幹事から出されている。例えば研究集会の前日の夕刻に必要な時間をとって行うべきであるという意見もあったが、幹事会全体の意見とはならなかった。

④ 平成2年度第2回幹事会

日時：1990年12月17日(午後6時～8時30分)

会場：学士会館分館(赤門前)

出席者：山川民夫(会長)、植田伸夫(庶務幹事)、野島庄七(会計監査)、原 一郎(前会長)、荒木英爾、井上圭三、猪飼 篤、石塚稲夫、大島美恵子、大橋昌子、児島英也、渋谷 勲、鈴木明美、脊山洋右、高野達哉、玉井洋一、田辺 忠、谷口直之、永井克孝、原島圭二、和久敬蔵、島崎弘幸(事務局) 以上22名。

欠席届：42名

(返信葉書による幹事会への提言はありませんでした。)

議事録

1. 平成2年度事業報告案および決算案の審議

1) 資料の総会での決定事項に追加記載

「平成4年度の研究集会は、山本 章幹事にお世話頂くことが決定した」ことを追加記載する。

2) 決算案の承認

資料に記載された平成2年度の決算案は、最終的な数値で報告されていないので、次期の研究集会会報に正確な数値を記載することとして審議を進める。(山川会長)

2. 平成3年度事業計画案および予算案の審議

1) 賛助会員会費の値上げ

植田庶務幹事より、賛助会費は昭和60年より、2万円のままで今日に至っている。次年度よりこれを1口として、2口の賛助会費の納入をお願いするようにしたいとの提案があり、幹事会はこれを承認した。

野島幹事(監査)より、各幹事、及び事務局は、各企業の担当者と連絡を密にとり、企業の担当者が代わっても賛助会費の納入が切れることのないようにして欲しいとの意見が出された。また、東京プリント㈱の賛助会員退会を承認した。

2) 支出の部「旅費」について

植田庶務幹事より、毎年年末に行っている幹事会の参加者に対し、これまでは一切の旅費を支出しないとしてきたが、都内からの出席者には一律千円、その外からの出席者には実費の半額を支給することを目的として、今回210,000円の予算を計上したとの説明があった。

予研

第33回研究集会発表演題の募集

① 演題の申し込み

発表15分討論5分を予定して居りますが、演題数によっては発表13分討論5分になる場合もあります。

申し込みには挿み込みの原稿用紙をお使いください。これは、このまま印刷になるではありませんから、タイプでもワープロでも手書きでも結構ですが、黒で読み易く書いてください。

申し込み締切 4月20日(土) 必着

② 審査ならびにプログラム編成

在京幹事、実行委員を中心に審査ならびにプログラム編成をおこない、改めて、講演集用原稿用紙をお送りいたします。(4月22日, 23日予定)

③ 講演集用原稿締切 5月20日(月) 必着

④ 研究集会プログラム編成 5月22日(水)

(申し込み、および講演集原稿送付先)

〒173 東京都板橋区加賀2-11-1

帝京大学医学部第一生化学教室内

日本脂質生化学研究会事務局 宛

予研

第33回日本脂質生化学研究会研究集会のお知らせ

期 日：平成3年7月15日(月)・16日(火)

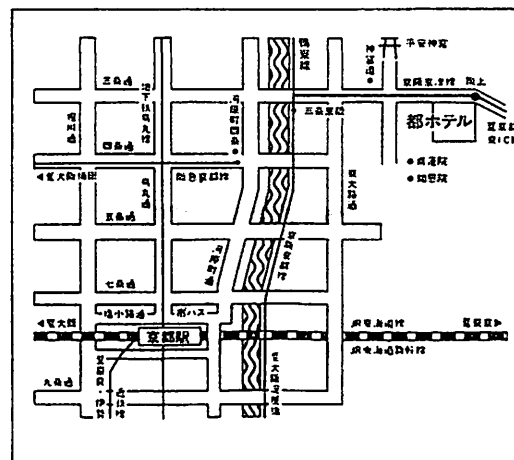
会 場：都ホテル(〒605京都市東山区栗田口)
TEL 075-771-7111 FAX 075-751-2490
新館4F瑞穂の間にて(講演、懇親会とも)

実行委員長：鬼頭 誠(〒611宇治市五ヶ庄 京都大学食糧科学研究所)
TEL 0774-32-3111 内線2719

参加費：4000円

懇親会費：5000円

宿泊予約：祇園祭シーズンのため、既に多数の観光客の宿泊予約が入っていると思われます。現時点では空室数は不確定ですが、御希望の方はJTB京都支店にてお取り扱い致しますのでお早めにお申込下さい。
(公共の宿は各自で直接お申込下さい。)



会場への交通案内

京阪京津線献上(けあげ)駅下車
京都駅、四条河原町より
市バス5系統にて神宮道下車、
徒歩5分
市内各所より
市バスにて東山三条下車、
徒歩10分
京都駅より
タクシーにて20分

宿泊の御案内

宿泊のお問い合わせは、JTB(日本交通公社)京都支店にてお取り扱いさせていただきます。下記へお願いいたします。

JTB(日本交通公社)京都支店
京都市下京区東塩小路町JR京都駅前
TEL 075-361-7244 FAX 075-341-1028
担当 石部、荒井

平成3年度 日本脂質生化学研究会総会のお知らせ

上記の総会を平成3年7月15日(月)、懇親会に先だって、新館4階瑞穂の間に於て開催いたします。ご出席賜りたく存じます。

会長 山 川 民 夫

議 題 1. 平成2年度事業報告

1. 平成2年度決算報告ならびに監査報告

1. 平成3年度事業計画ならびに予算案

以 上

平成3年度 日本脂質生化学研究会幹事会のお知らせ

上記幹事会を平成3年7月15日(月)正午(プログラム編成上、若干の変異があるかもしれませんが)より新館3階コスモホールで開催いたします。幹事の皆様のご出席をお願いいたします。

議 題 1. 平成3年度日本脂質生化学研究会総会への提案事項の検討

1. そ の 他

会長 山 川 民 夫

- 。 幹事の皆様には別途、ご案内を申し上げます。
- 。 尚、昼食代1,000円を申し受けます。

これに対し、21万円では、遠来の幹事一人に2万円の旅費を支給するとしても十人分ではない。とても出席者全員に旅費を手当することはできないと言う意見がだされた。また、遠来の幹事に幾らかの補助をすることは良いが、都内の幹事への支給は必要ないとの意見もあった。

谷口幹事からは、各地方で代表幹事を決めて意見を取りまとめてもらい、代表幹事の出席に対して旅費を支給したらどうかという提案が出された。

最終的な結論がでないまま、山川会長と植田幹事で更に検討することとした。

3) 名誉会員、幹事の推薦

野島庄七氏、日下喬史氏が名誉会員に推挙された。また、新幹事に阿部敏明氏(帝京大)、寺本民生氏(東大)、佐武 明氏(新潟大)が推薦された(注 佐武明氏は非会員)。

いずれも次期総会に報告し、その承認を経て決定する。

3. 第33回研究集会の準備状況報告

実行委員長の鬼頭幹事に代わって、植田庶務幹事より準備状況の説明があった。

4. 第34回研究集会について

実行委員長の山本幹事に代わって、田辺幹事より研究集会の日程について説明があった。

研究集会は、平成4年6月17日(水)、18日(木)を予定している。

また、同19-20日は、動脈硬化学会が大阪で開催される予定になっており、それに関連づけられるようなシンポジウムを計画している。

5. 日本脂質生化学研究会の運営について

研究会の運営、幹事会のあり方について、幹事の皆様に問い合わせの手紙を送る予定である。(植田庶務幹事)

6. 日本学会協議会候補および推薦人の決定

山川会長に一任する。

7. 文部省科学研究費 脂質データベースに関する報告

植田庶務幹事より説明があった。

8. その他

平成3年2月に予定している会報(サーキュラー)の発行の準備にはいっている。それに

掲載するための原稿や、記事を寄せてほしい。また、会員名簿を新しくしたいと考えており、次年度中に準備を行い、平成4年度の予算に作成のための費用を計上するつもりである。(植田庶務幹事)

⑤ 平成2年度事業報告(平成2年1月1日~12月31日)

○ 会 員

正 会 員 894名(平成元年度 928名)

二年度新入会 41名

” 退 会 75名

名誉会員 14名(平成3年度事業計画案参照)

賛助会員 23社(” ”)

○ 役 員

会 長 山 川 民 夫 会計監査 野 島 庄 七

庶務幹事 植 田 伸 夫 任期平成2年末まで

幹 事 (平成3年度事業計画案参照)

○ 事 業

1. 第32回研究集会の開催

平成2年7月6日(金) 7日(土)

都市センターホール

実行委員長 秦 葭 哉 教授

参加人員 416

演 題 数 シンポジウム 8題

一 般 95題

2. 脂質生化学研究32巻の発刊

本 文 420頁

3. 脂質生化学研究サーキュラー1990の発刊

本 文 20頁

4. 会 議

日本脂質生化学研究会総会

平成2年7月6日(金) 都市センターホール

平成2年度第1回幹事会

平成2年7月6日(金) 都市センターホール

平成2年度第2回幹事会

平成2年12月17日(月) 学士会館分館

⑥ 平成2年度決算報告

別掲(8頁)

⑦ 平成3年度事業計画

○ 会 員

正 会 員 微増の見込み

名誉会員 今井 陽, 数野太郎, 金田尚志, 坂上利夫, 高橋善弥太, 永井諄
爾, 野田万次郎, 原 一郎, 藤野安彦, 堀 太郎, 松本 亮, 山
川民夫, 山崎三省, 山添三郎

○ 役 員

会 長 山 川 民 夫 任期 平成4年12月31日迄

庶務幹事 植 田 伸 夫 同 上

会計監査 野 島 庄 七 同 上

幹 事 (任期 平成3年12月31日迄)

赤沼安夫, 秋野豊明, 荒木英爾, 安藤 進, 猪川嗣郎, 伊藤俊洋,
板坂 修, 井上圭三, 遠藤 章, 大島美恵子, 大橋昌子, 岡本光
弘, 奥田拓道, 奥山治美, 小野輝夫, 川口昭彦, 渋谷 勲, 鈴木
明美, 脊山洋右, 谷口直之, 玉井洋一, 中野益男, 西村顕治, 野
沢義則, 野間昭夫, 松原淑子, 水柿道直, 武藤泰敏, 和久敬蔵
(任期 平成4年12月31日迄)

赤松 稔, 上田隆史, 小倉道雄, 香月裕彦, 加納英雄, 北 徹,
日下喬史, 楠瀬正道, 児島英也, 斎藤国彦, 菅野道廣, 武内 望,
武富 保, 千田信和, 内藤周幸, 永井克孝, 橋本 隆, 秦 葭哉,
林 陽, 林 浩平, 原島圭二, 飯田静夫, 平山 修, 穂下剛彦,
牧田 章, 三成 脩, 村松敏夫, 山下 哲, 山田晃弘, 山本 章

蔵内百治

(任期 平成5年12月31日迄)

猪飼 篤, 池沢宏郎, 石塚稲夫, 石橋輝雄, 伊藤精亮, 古賀洋介,
鬼頭 誠, 田辺 忠, 矢野郁也, 山本尚三,

(任期 平成6年12月31日迄)

宇田 裕, 木村修一, 島崎弘幸, 鈴木康夫, 高野達哉, 塚谷博明,
二木鋭雄, 宮澤陽夫

(以上 80名)

○ 事 業

1. 第33回研究集会の開催

平成3年7月15日(月) 16日(火)

京都 都ホテル

実行委員長 鬼 頭 誠 教授

2. 脂質生化学研究33巻の発行

7月1日 予定

3. 脂質生化学研究サーキュラー1991の発行

2月20日 予定

4. 会 議

総 会 7月15日(月) 都ホテル

平成3年度第1回幹事会

7月15日(月) 都ホテル

平成3年度第2回幹事会

12月 未定

⑧ 平成3年度予算

別掲(8頁)

⑨ 決算および予算表

収 入 の 部	平成二年度		平成三年度
	予 算	決 算	予 算
正 会 員 会 費	2,200,000	2,013,000	2,200,000
入 会 費	100,000	82,000	100,000
賛 助 会 員 会 費	440,000	400,000	440,000
講 演 集 売 上 げ	120,000	168,000	160,000
広 告 収 入	850,000	850,000	850,000
利 子	316	10,375	60,000
寄 付 金	0	0	0
雑 収 入	0	0	0
小 計	3,710,316	3,523,375	3,810,000
前年度よりの繰越金	1,972,510	1,972,510	2,141,786
計	5,682,826	5,495,885	5,951,786

支 出 の 部	平成二年度		平成三年度
	予 算	決 算	予 算
研究集会補助	500,000	500,000	500,000
会報製作費	341,440	284,200	350,000
講演集製作費	1,650,000	1,682,703	1,900,000
旅 費	100,000	35,000	70,000
郵送料・通信費	550,000	434,664	400,000 3)
会費収納経費	35,000	32,760	35,000
事務用品費	20,000	195,084 1)	120,000 3)
会 合 費	120,000	169,688	120,000
謝 金	60,000	15,000	50,000
総 会 経 費	6,000	5,000	5,000
事 務 経 費	300,000	0 2)	600,000 2)
雑 費	30,000	0	30,000
小 計	3,712,440	3,354,099	4,180,000
次年度への繰越金	1,970,386	2,141,786	1,771,786
計	5,682,826	5,495,885	5,951,786

- 1) 名簿、会計用ソフトの更新 Databox 90,842円
RAMボード増設 9,830円
封筒代金 88,200円
0円
- 2) 平成2年度事務経費の支出 600,000円
3年度 ”
- の理由は平成3年度への繰越金のうち2,000,000円が定期預金(期日平成3年3月21日迄)になっているため平成3年度で支出することにした。
- 3) 従来、通信・送本用封筒が郵送料・通信費の費目で扱って居たが、事務用品費で扱うことにした。

サンタバーバラ日記

—「糖脂質の生理機能に関する国際会議」に参加して—

T 生

目が覚めて隣のベッドを見ると、同室の先生の姿は既になかった。

昨夜は確か午前1時過ぎまでウィスキーをともにディスカッションしていたはずなのに……。

ここはサンタバーバラ、ロスアンジェルスから車で約2時間の西海岸に面したリゾート地にあるミラマーホテル。ゴードン会議がおこなわれる場所でもある。1991年7月19日から始まった「糖脂質の生理機能に関する国際会議」は2日目の朝を迎えていた。この会議は糖脂質研究のなかで指導的役割を果たしてきたC. C. Sweeley教授 (Michigan State Univ.) と箱守仙一郎教授 (Biomembrane Inst.) 60才を迎えたことを祝う意味を含めて、主に日米の糖脂質研究者が集まっていた。7月18日にはWelcome Receptionが開かれ、旧交を暖めたり、お互いの友人を紹介する風景が見られた。この会議には留学中の人も含め日本からは約50人近くの研究者が参加していた。

会議は翌日から始まった。主催者の一人、G. Dawson (Chicago Univ.) から会議の主旨と進行の案内がされた後、まずSweeleyの講演から始められた。糖脂質のガスクロ分析やMS分析の導入など画期的な仕事を展開してきた彼の研究が簡単に紹介されたのち、細胞増殖を抑制するGM3とEGF receptorとの相互作用をコンピューターを用いて3次元的に解析する試みを披露した。細胞膜で起きている反応をどれ程正確に表現しているかは今後の研究に委ねられるとしても新しい研究の方向を示す具体的な内容であった。

午前のセッションは「糖脂質の発現」というタイトルで、B. Macher (リンパ系細胞の分化と糖脂質)、A. Suzuki (糖脂質発現の遺伝制御)、M. Iwamori (ホルモンによる制御)、そしてJ. Lowe (Univ. Michigan) の分子生物学的手法を用いたフコース転移酵素の解析法が紹介された。糖脂質とMolecular Biologyとを結び付ける具体的な研究として高い評価を受けている研究である。R. L. Lester (Kentucky) からは酵母のスフィンゴシン依存性変異株を用いた研究成果が報告された。

食事を参加者全員でともにしたあとは、午後4時まで自由な時間が設けられている。難しい発現(発言)制御から開放された参加者の多くは海水浴へあるいはカリフォルニアワ

インのワイナリー見学へ。小生は、以前のゴードン会議でテニス友達?となったChatterjee (Johnc Hopkine Univ.) やMc. Cluor (Bocton) にテニスに誘われることになった。

4時からは「接着と認識における糖脂質」のセッション。K. Sandohoff (Bonn) とYoung (Virginia) はともにゴルジ装置のアッセンブリ阻害薬Brefeldin Aを用いて糖転移反応が行なわれる部位を証明する興味深い実験を報告した。7時から夕食。8時からポスターセッションに移り、アルコールを手にして10時まで盛んな討論が続けられた。小生など一通り話がすむとどうも間が持てず、難しい議論から逃れるように部屋にもどって来ると、先生は既にテーブルをテラスに出して数人の参加の先生方とアルコールつきディスカッションを始めておられた。

先生は、この日最初の座長を無事に努められたことも手伝って、リラックスされた様子。アルコールも急ピッチでベッドにはいったのは1時をとうにまわっていたはずなどと前夜のことをふり返っているところへ、「ヤー、この海はつれるね」といってイシモチの大きくしたような魚を数匹手に戻ってこられた。

驚くべき体力である。好きなものには時の差なんて……。そもそも日本から釣り竿を持ってこられる準備の良さがまたしびれてしまう。なにとはともあれ、「朝飯前の仕事」をしてこられたのである。朝飯前の成果は、今夜の酒のつまみとなるのだろうか、先生はせせと氷で釣ってきた魚を保存しはじめたのである。

2日目も会議は始まった。

「糖脂質と情報伝達」のセッションでY. Nagai はGQ1bによる神経芽細胞の神経突起の伸展と細胞表面リン酸化酵素について講演、続いてスフィンゴシンが細胞の情報伝達に関与することを提唱するA. Merrill (Atlanta) の報告が行なわれた。「情報伝達に関与するスフィンゴシンはどこから来るのか?」新しいスフィンクスの謎が提起された。コレラ毒素とGM1で有名なP. Fishman (NIH) はGM1の糖鎖をタンパクやリン脂質に結合させたneoganglioconjugatesを合成してコレラ毒素との反応を解析した成果を述べた。

午前の会議から開放された小生と先生そしてChatterjeeはレンタカーを調達し、サンタバーバラのダウンタウンへとくりだした。日本食で空腹を充たした後、この町の古い寺院を訪ねた。礼拝堂に入ってゆくと今日の講演を終えたMerillに会えた。と突然、Chatterjeeは両手を挙げて、堂いっばいに響くばかりの声で、「スフィンゴシン、オー、スフィンゴシン」と祈りに似た口調で唱え始めたのである。続いて先生の笑いが堂内に響き

わたる。(余談だが、最近「スフィンゴシンのうた」を創ろうと考えている。ガングリオシド音頭は既に書き始めた。2番の歌詞は未だである。1番が2行でただけで止まっている。) スフィンゴシンの祈りを捧げた寺院を後にして海岸へと車を進めた。もちろん釣りをするために(ここサンタバーバラの海岸には観賞すべき人魚の姿はない)。先生は数匹釣り上げた。意気揚々とわたしたちは4時から始まる会議に戻った。

「糖脂質-免疫修飾と癌」のセッションはS. Hakomoriの講演で始まった。

S. Ladish (UCLA) のあとは、A. Makita, M. Saito, R. Kannagi, S. Handa と日本の研究者の発表が独占した。この日の夜は箱守教授の60才を祝うパーティーがもたれた。R. Lane, Young, T. Feiziなど論文で馴染みの研究者が教授の人となりを紹介した。パーティーから戻ると先生は早くも魚を三枚におろし、個室パーティーの準備を終えていた。1部の魚はなんとバスルームのヒーターの前に吊されて焼き魚に化しつつあった。我々だけが魚にありついては申し訳ないと、他の先生方を招待することに小生は成功してしまった。個室パーティーもやがて1時を過ぎて……。

第3日目の午前のセッションは「神経の発育と可塑性」。S. Andoの生理学的手法を取り入れた記憶とガングリオシドの研究は印象深く、今後の発展が楽しみに思われた。J. Moskal (Albert Einstein), G. Tettamanti (Milan), T. Taketomiの講演をしっかりと聞いたのち、かねてからの予定どおり、小生、先生そして運動不足の先生たちと、昼食もそうそうにゴルフ場へと車の人となった。

それでも夕方のセッションは4時定刻に始まり、「病気と糖脂質」の講演が行なわれた。(小生は少し遅刻したことを告白します。) ChatterjeeはLacCer合成リボプロテインについて、L. Svennerholmはアルツハイマー病に対するガングリオシド療法の試みを述べた。

その夜は、Sweeley教授のためのパーティーが催された。多くのお弟子さんが彼の1面を紹介し、会場は和やかな雰囲気一杯となった。部屋に戻ると先生はこの日釣り上げた魚と鮑を盛り付け、「これから出前パーティーと酒落こもう。行く先は決まっている。」とのたまう。出前から帰ってからまたイッパイはそろそろ予想がつくようになってきた。

4日目、会議の最終日は「スフィンゴ糖脂質研究の未来」を語る研究者が講演した。F. Inagaki, S. Sonnino (Milan), T. Feizi (London), K.-A. Karlsson (Goteborg)。彼らの成果は糖脂質と受容タンパクとの反応がNMRをもちいた解析法で語られるときが遠くないことを示唆している。

この会議を印象深くさせたのは、出席者全員が同じホテルに宿泊し、食事をともにし、さらに午後にかかなりの自由時間を設けた企画である。国の内外の研究者と親しく討論したり、共同研究の機会を提供したり、新しい研究交流の場がこの企画によって生まれてきたに違いない。会議の後、それぞれの参加者は、再会を期して厳しい研究の場へと帰途についた。

以上、糖脂質漬けになった会議の印象をプログラムを振り返りながらまとめてみた。糖脂質の研究も1次構造から3次構造へ、酵素の精製から遺伝子解析へ、糖脂質の細胞内への情報伝達の仕組み解明へと大きく動いてゆく過渡期にある。Glycobiology, Glycotechnology という新造語も口に馴染んできた。Sweeley 教授と箱守仙一郎教授の60才を祝う今回の会議を、次の糖脂質研究展開を導きだす引き金にしたいものである。

INTERNATIONAL CONFERENCE ON THE BIOLOGICAL FUNCTION
OF GLYCOSPHINGOLIPIDS に参加して

帝京大学第二生化学
田中（飯田）直子

昨年7月、INTERNATIONAL CONFERENCE ON THE BIOLOGICAL FUNCTION OF GLYCOSPHINGOLIPIDSに、石塚教授および同研究室の友利道子氏とともに参加する機会をいただいた。このカンファレンスに関する「真面目な」報告は瀧孝雄先生が書かれるとのことなので、学会内容に関する青くさい感想は割愛し、会の全体的な印象を中心として簡単に書かせていただこうと思う。

このカンファレンスは Charles C. Sweeley教授および箱守仙一郎教授の60歳（日本風に言うと還暦である）のお祝いかねて計画されたものであり、糖脂質分野内のat homeな雰囲気のものであった。会場となったサンタバーバラはロサンジェルスより北へ約150 km（車で約2時間）、日本ではあまり知られていないが太平洋に面したリゾート地である。ここにプライベートビーチをもつMiramar Resort Hotelが、会場であるとともに参加者全員の宿泊所であった。

朝、昼、晩の食事は、講演会場とポスター会場の間にあるホールでそろって食べる。講演は朝8:00よりはじまり、夜10:00すぎまでポスター討論で盛り上がる...と書くといかにもハードだが、実は12:00~4:00の4時間を昼休みにあててあり、この時間に参加者は自由に楽しむことができる。会場で知合った人と親交を深めるもよし、気の置けない人達と気晴しをするもよし、また観光を兼ねた遠出をするもよし。ホテルにはプライベートビーチの他にプールが2つとテニスコートがあり、レンタカー、レンタサイクルもそろっている。

7月の12:00~4:00というと日本では楽しんで散歩というような気候ではないが、サンタバーバラは日差しは強いが空気は乾燥して風は涼しい、いわゆる高原的な気候である。私たちはホテルからサンタバーバラの町まで片道約30分ほどの道のりをいい気分でサイクリングし、腕に後で泣きたくなるほどの日焼けをつくってしまった。サンタバーバラの町は、その地名からもわかるようにもともとスペイン系移民の町で、白に赤、黄といったような色調のはっきりした、見て歩くだけでも楽しいきれいな町である。海沿いであるため魚料理はおいしく、果物もおいしい。参加者の中には日本より釣道具を持参し、アメリカ西海岸の魚を釣ってその味を楽しんでおられた方もいたようである。

ホテル内の散策もまた楽しい。Miramar Hotelは、緑の中に様々な形の小さな建物が散在する、いわゆるバンガロー形式のホテルである。私たちはツインルームが6~8つほど集ったアパートメントタイプの建物であったが、中にはかわいらしい1戸建て風の建物もあり、少し大きめの家族用のものなどは映画にでも出て来そうな風情である。こんなところでのんびりと休暇を過ごしたら最高の贅沢かもしれない。

ビーチで波とたわむれるのも愉快であった。これまで遠い存在であった先生方と波のりの練習をいっしょにしたり、あるいはテニスコートでいっしょに汗を流したりした後のディスカッションは、またひと味違って感じられるようである。特に私のように、ただでさえ気おくれするところに言語の壁がある場合には、このような“遊びの効果”はてきめんであった。留学経験のない私にとっては、十分に意志を伝えることができないながらも他国のしかも同世代の人達と接することができたことは、貴重な経験であったのである。また同じ日本人どうしても、国内の学会ではなかなか言葉をかわす機会がなかった人と、こんなところで親しくなる.....なごやかな雰囲気のある会であった。参加者が同じホテルで寝起きを共にするなどということは、少し大きな学会になるとなかなかできないことであ

るが、その良さも存分に味わうことができたようである。学会が、情報収集の場であるとともに、研究の輪(和?)を広げる場であるとすれば、1つの成功した形であったように思う。

最後の晩には、Sweeley、箱守両教授の祝賀会が開かれた。これまで両教授のもとで研究活動をおこなった方達の両教授へ贈る言葉を中心に、Sweeley教授にまつわるエピソードをマンガ仕立てでスライドにしたものやビデオなど、なんともウィットに富んだユーモラスなものであった。またポスター会場の隅にはそれぞれの時代の教室員の写真が貼られ、教室の歴史が語られていた。それらを見、聞くにつけ、今回のカンファレンスは両教授の、特にSweeley教授の人柄を大きく反映したものであったのではないかと、勝手に思いをはせたりしている次第である。

簡単ではあるが最後に、このカンファレンスを成功させるために努力された多くの方々に敬意を表してしめくくりの言葉としたい。



Miramar Hotelの庭で

第32回ICBLについてのご案内

東京大学医学部栄養学教室
脊山 洋 右

第31回ICBLはドイツのミュンスターで開催されたが、今年開かれる第32回カンフェレンスはスペインの古都、グラナダにて行われる。

既にファーストサーキュラーが出回っているのでご存じの方もおられると思うが、1991年9月18日(水)~20(金)に予定されている。主催者はグラナダ大学のSuárez教授で、テーマとしては下記の3項目が取り上げられる。

- 1) The oxysterol pathway and its biological implications.
- 2) Synthesis and secretion of lipoproteins in the intestine.
- 3) Polyunsaturated fatty acids of the n-3 series: biological and metabolic roles.

学会は招待講演とコロキウムおよびポスター発表という、従来からの形式に則って運営されるが、一般募集であるポスター発表の中からいくつかのものが口頭発表に回るということも例年の通りである。

上記のテーマに沿わないものでも、脂質の生化学および分子生物学に関するものであれば採用される。

Suarez教授は動脈硬化やリポタンパク質の研究をしている女性で、数年前に薬学部の新しい建物ができて移転したばかりの研究室を運営している。

昨年10月にバルセロナで第1回ハーダー腺国際シンポジウムが開かれた際にSuárez教授の招きでグラナダを訪れたので、町の雰囲気をお伝えしたい。

グラナダはスペイン南部のアンダルシア地方の中心に位置する古い町で、小高い丘の上にそびえるアルハンブラ宮殿は700年近い歴史を有する。1492年にイサベラ女王がこの城塞からイスラム教徒を追い出してスペインの統一を成し遂げたのは余りにも有名で、1992年にバルセロナでオリンピックが開催されるのも、その500周年記念という意味も込められている。

アルハンブラ宮殿から眺めるシエラネバダ山脈も雄大で、思いは遠く地中海を越えてアフリカにまで達しようというものである。川を隔てたアルバイシン地区はアルハンブラがカトリック教徒の手に落ちて

からも長い間イスラム教徒が住みついていたという、迷路のような白い町並みである。

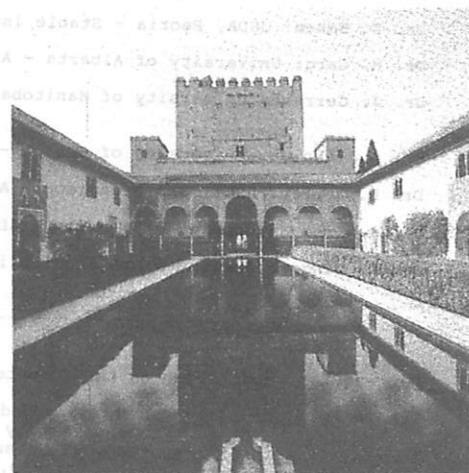
グラナダは大学の町でもあり、スペイン最古の大学の一つでもある。人口24万のうち4万人は学生であるから、学園都市とも言えよう。医学部を始め大部分は町中に散在しているが、薬学部を始めいくつかの学部は近年になって町外れの丘の上に移転している。ICBLそのものは町の中心にある大学本部のある構内で行われるが、イスラムの建築様式を保った古い建物も歴史を感じさせる。

アンダルシア地方にはこの他に首都のセビリアやコルドバがあり、イスラムとカトリック芸術が混ざりあった数多くの遺跡は見飽きないものがある。学会の機会に訪れるに格好の地である。

セカンドサーキュラーは1月中に出来上がることになっているが、関心のお有りの方は下記に手紙ないしはファックスで申し込んで戴きたい。

Correspondence:

M.^a José Alejandre
Depto. de Bioquímica y Biología Molecular
Facultad de Ciencias, Universidad de Granada
18001-Granada, Spain
Fax: (34)58274258



The Court of Myrtles... the balance and serenity of Nasrid architecture



Continuing Education

Faculty of Medicine
University of Toronto

PRELIMINARY ANNOUNCEMENT

Third Toronto Workshop on Essential Fatty Acids:

ALPHA-LINOLENIC ACID IN HUMAN NUTRITION

May 17 - 18, 1991

University of Toronto

AMA Category 1 credits.

Poster Presentations are invited. Please submit abstract by March 1, 1991.

List of Proposed Speakers/Topics:

- Dr. J. Beare-Rogers: Health and Welfare, Ottawa - ALA metabolism in animals
Dr. K. Bjerve: University of Trondheim, Norway - Clinical studies with ALA
Dr. H. Cook: Dalhousie University - ALA in the brain
Dr. S.C. Cunnane: University of Toronto - ALA metabolism in humans
Dr. T. Dick: University of Manitoba - ALA metabolism in fish
Dr. E. Emken: USDA, Peoria - Stable isotope studies with ALA
Dr. M. Garg: University of Alberta - ALA effects on omega - 6 fatty acids
Dr. J. Gerrard: University of Manitoba - ALA effects on prostaglandin metabolism
Dr. B.J. Holub: University of Guelph - ALA metabolism in platelets
Dr. D. Kelley: USDA, San Francisco - ALA and the immune response
Dr. J. Sim: University of Alberta - ALA metabolism in the chicken
Dr. P. Singer: Berlin - ALA studies in hypertension and hyperlipidemia

Request for information on the Toronto Workshop on Essential Fatty Acids:

Return to: Continuing Medical Education
University of Toronto
Medical Sciences Building
Toronto, Ontario
M5S 1A8

Name: _____ Phone: _____

Address: _____

(City/State) _____ (Postal/Zip Code) _____



II International Conference on the Health Effects of Omega-3 Polyunsaturated Fatty Acids in Seafoods

March 23, 1990

PRESS RELEASE

The 2nd International Conference on the Health Effects of Omega 3 Polyunsaturated Fatty Acids in Seafoods included over 100 presentations by scientists from 25 countries during March 20-23. About 300 people discussed the new research results that led to several important recommendations.

1. Based upon clear evidence of an essential role for omega 3 fatty acids in human development and health, the scientists recommended that all diets for humans should include omega 3 fatty acids, and they expressed concern that steps be taken to stop marketing enteral and parenteral formulas that fail to include any omega 3 fatty acids.
2. The researchers urged that the appropriate government agencies officially recognize the vitally important differences between omega 3 and omega 6 polyunsaturated fatty acids. Estimates of the average omega 3 nutrition consumption in the U.S.A. presented by USDA scientists agreed with new nutrient measurements reported from a NHLBI study, with both studies indicating inadequate supplies of omega 3 fatty acids in the typical American diet.
3. New evidence with an extremely high level of statistical precision, from the NHLBI study, suggests that the daily dietary intake of 0.5 to 1.0 grams of long chain omega 3 fatty acids per day reduces the risk of cardiovascular death in middle aged American men by about 40%, and some new data suggests that omega 3 fatty acids may also decrease cancer mortality.
4. The research reports make it increasingly evident that eating omega 3 fatty acids can have beneficial effects on chronic inflammatory and cardiovascular diseases.
5. An international committee was established to help coordinate and enhance the rapid continued progress in this important area of biomedical research.

第1回国際学会
「ビタミン・バイオフィクターと生命科学」
The 1st International Congress
on "Vitamins and Biofactors in Life Science"

日本ビタミン学会 会長 奥田 邦雄

このたび本学会では世界の主導的な立場に立って、首題の国際学会を下記の要領で開催します。皆様の積極的な御参加をお願いします。

記

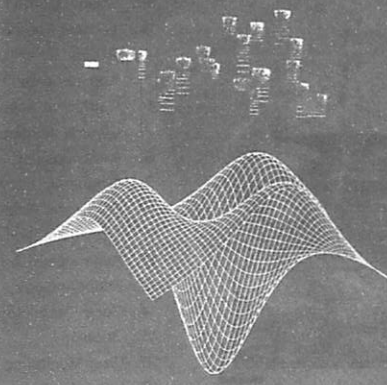
開催期日：平成3年9月16日(月) - 20日(金)
開催場所：神戸国際会議場(ポートアイランド)
主催：日本ビタミン学会第1回国際学会「ビタミン・バイオフィクターと生命科学」組織委員会
委員長：奥田 邦雄
事務総長：勝沼 信彦
共催：日本ビタミン学会 財団法人国際科学振興財団 社団法人ビタミン協会
日本栄養・食糧学会 日本生化学会 日本臨床栄養学会
日本栄養改善学会 日本農芸化学会 微量栄養素研究会
連絡先：事務局：徳島大学酵素科学研究センター 勝沼 信彦
〒770 徳島市蔵本町3-18-15 電話 0886-31-3111 (内線2550)
ファックス 0886-33-0771

プログラム：各分野の第一人者の特別講演と、下記の21題のシンポジウムを予定しています。一般演題(講演ならびにポスター)も募集します。
サーキュラーを事務局へ御請求ください。

- | | |
|---|--|
| 1 Vitamin B ₁₂ - Challenges for the Future | 11 Zinc as a Biofactor in Basic and Clinical Medicine |
| 2 New Horizon in the Research on Vitamin D Metabolism and Functions | 12 Recent Advances in Thiamine Research |
| 3 Vitamin E: Approach to Atherosclerosis | 13 Vitamin B ₆ and PQQ |
| 4 Bioavailability of Vitamins | 14 Role of Biofactors as Biomodulator |
| 5 Free Radical Pathology and Antioxidants | 15 Recent Topics in Vitamins in Biological Oxidation-Reduction |
| 6 Vitamins and Biofactors against Carcinogenesis | 16 Recent Vitamin C Research and Human Health Benefits |
| 7 Aging and Vitamins | 17 Recent Advances in Vitamin A and Carotenoids |
| 8 Recent Advances in Vitamin Responsive Inborn Errors of Metabolism | 18 Progress in G-CSF (Basic and Clinical Aspects) |
| 9 Current Advances in Vitamin K Research | 19 Biotechnology of Biofactors |
| 10 Eicosapentaenoic Acid - Physiology and Pathology | 20 Biogenic Amines in Nervous Systems |
| | 21 The Biopterin System: Recent Advances |

1st IUB Conference
Biochemistry of Diseases

June 1-6, 1992
Nagoya, Japan



SCIENTIFIC PROGRAM

The Scientific Program will include Plenary Lectures, Symposia, Colloquia and Poster Sessions.

They will cover topics within the following areas:

1. Cancer (Cancer cell biology, Molecular basis of carcinogenesis)
2. Cardiovascular disorders
3. Brain aging
4. Immune response and its abnormalities
5. Endocrine and metabolic disorders
6. Inflammation and infection
7. Mitochondrial disorders
8. Genetic disease, diagnosis and therapy
9. Sleep and biorhythm
10. Cell proliferation, differentiation and development
11. Neurochemistry and neuropsychobiology
12. Nuclear factors and gene expression
13. Signal transduction
14. Protein kinases and phosphatases
15. Proteases and inhibitors
16. Cytoskeleton and cell adhesion
17. Molecular basis of glycobiology
18. Transporters, carriers and channels
19. Cytokines and receptors
20. Biologically active peptides
21. Highly ordered molecular structures
22. Prostanoids
23. Oxygen radicals
24. Drug delivery, action and metabolism
25. Nutrition and trace elements
26. Environmental medical science
27. New technology in biochemistry



THE 5TH ASIAN-PACIFIC CONGRESS OF CLINICAL BIOCHEMISTRY



September 29 - October 4, 1991

KOBE, JAPAN

International Conference Center Kobe

Organized by
Japan Society of Clinical Chemistry
Asian and Pacific Federation of Clinical
Biochemistry

Under the auspices of
International Federation of Clinical
Chemistry

Scientific Program

Topics (tentative) to be covered in the Congress
include the following:

A. Topics

1. Laboratory Management and Information System
2. Quality Control Program
3. Clinical Chemistry Education
4. Clinical Chemistry and Biophysics
5. Age-dependent Clinical Chemistry
6. Nutritional Assessment
7. Clinical Immunology (include AIDS in Asia)
8. Immunoassay
9. Diagnostic Enzymology
10. Enzymatic Analysis
11. Transplantation and Clinical Chemistry
12. Advances in Analytical Performances
13. Endocrinology
14. Gene Technology
15. Oncology
16. Drug Monitoring and Toxicology
17. Urine Analysis
18. Atherosclerosis and Hypertension
19. Clinical Chemistry in Developing Countries
20. Comparative Clinical Chemistry
21. Clinical Chemistry in Sports Medicine

B. Workshops and Symposia Organized by Visiting National and International Association

5th International Congress on Oxygen Radicals

ACTIVE OXYGENS, LIPID PEROXIDES AND ANTIOXIDANTS

FIRST ANNOUNCEMENT

PRESIDENT

KUNIO YAGI

VICE PRESIDENT

MOTOHARU KONDO

ETSUO NIKI

SECRETARY TREASURER

TOSHIKAZU YOSHIKAWA

Preliminary Scientific Program

Session I: *Active Oxygens*

Session II: *Lipid Peroxides*

Session III: *Antioxidants*

Session IV: *Free Radical Pathology*

Session V: *Food (Nutrition and Toxicology)*

General Information

Date: November 17-21, 1991

Venue: Kyoto International Conference Hall,
Kyoto, Japan

Official Language: English

0001

東京健康科学専門学校

Enjoy our empty beaches
See Ayers Rock's changing hues
Float among the coral reefs
And feed some kangaroos



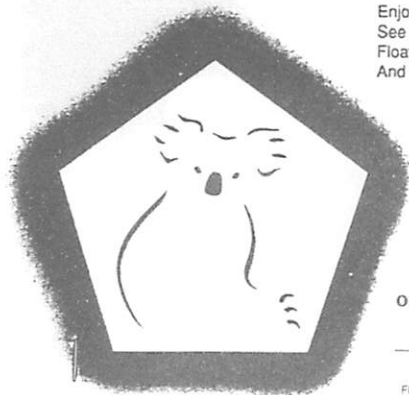
Come to help us celebrate
The art Ralph Holman made
In lipid biochemistry
Come, come to Adelaide.....

For the

Third International Congress on Essential Fatty Acids and Eicosanoids

Adelaide, Australia February 29th - March 4th 1992

For further details, contact Dr R Gibson, Department of Paediatrics,
Flinders Medical Centre, Bedford Park, South Australia 5042 : Fax 61-8-2770055



編集後記

暖冬, 暖冬といていたはずなのに2月になると
寒い日がつづきました。それでエンジンのかかりが
悪く, またサーキュラーの発行が遅れました。

来年はそんなことがないようにと毎年思っている
のですが……。科研費の申請だって締め切りが早く
からきまっているのに, 何故か締め切りぎりぎりに
ならないと書けません。会員の皆様の中にも同様な
症状をお持ちの方が居られるようですが…… DNA
でも調べてみれば共通の変異でも見つかるのでしょ
うか。

事務局